

# 総合的学習の展開を阻害する要因についての検討(3) —評価の方法に焦点化して—

A Study of Factors that Inhibit Implementation of Integrated Studies Learning (3)  
—By Focusing on the Method of Assessment—

村 井 万寿夫  
Masuo MURAI

## 〈要旨〉

1998年創設の総合的な学習の時間の評価については学習指導要領では示されなかった。このことがその後の総合的な学習の時間の展開の阻害要因の一つになっているのではないかと捉え、評価についての考察を行った。その結果、翌年の1999年告示の小学校学習指導要領解説の中で、教科のように試験の成績によって数値的に評価することはせず、児童のよい点、学習に対する意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて適切に評価することとし、いくつかの方法が例示された。しかし、当時の文献で見られる具体的な評価方法は見受けられない。文献で確認できたポートフォリオ評価やパフォーマンス評価が学習指導要領に登場するのは2008年改訂時であり、筆者独自の小学校教師を対象とした調査において、ポートフォリオ評価やパフォーマンス評価を用いる度合いは50%程度の傾向にあることが示された。また、ルーブリックを用いている度合いは極めて低い傾向にあることも示された。

## 〈キーワード〉

総合的学習、評価の方法、ポートフォリオ評価、パフォーマンス評価、ルーブリック

## 1 研究の背景

1996年の第15期中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について—子供に「生きる力」と「ゆとり」を—」は、ゆとりの中で生きる力をはぐくむことを示したものであり、生きる力とゆとりをはぐくむ学校づくりを目指したものである。

亀井ほか(1996)が生きる力とゆとりをはぐくむための授業改善として、「①聞く一方の授業から、自分から進んで教材に働きかける授業へ、②覚えることの多い授業から、活動することの多い授業へ、③知識を増やす授業から、知識を働かす授業へ、④答えることを重視した授業から、自分の考えを持つ授業へ、⑤教わろうとする授業から、自分の生き方を考える授業へ」<sup>(1)</sup>を挙げている。

これら5つの授業改善は教科の学習にも当てはまるが、従来の教科の学習だけでは「生きる力」と「ゆとり」をはぐくむことが難しいため、新たな学習の時間として「総合的な学習の時間」が生まれたと考えることができる。

こうして、道徳、特別活動に次いで3番目の領域として1998年に創設された「総合的な学習の時間」(以下「総合的学習」と称す)は小学校学習指導要領第1章総則第3に

において、「総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする」<sup>(2)</sup>と示しているように、各学校で独自の教育活動が行えることに特色がある。

もう一つの特色として、独自の教育活動が行える半面、評価の難しさがあると言える。これに関して黒上(2002)は、「おそらく、総合的な学習の成果をとらえるのに適した唯一の方法などは、存在しない。客観的にそれを示す方法も原理的にありえない」<sup>(3)</sup>と指摘している。

総合的学習は教科の学習のように知識や技能をどれだけ身に付けたかを評価するものでないことは、学習指導要領にて示す2つのねらい「(1)自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。(2)学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方から考えることができるようにする」<sup>(4)</sup>から導き出せることである。

したがって、学習が展開する過程で学びの状況を把握して途中の評価を行い、次の学習へと展開していきながら、

その都度評価していくことが指導にあたる教師には求められると言える。

このようなことから総合的学習の評価は難しく、展開を阻害する要因の一つになっていることが予想される。

そこで、本研究においては、総合的学習の評価に焦点を当て、創設期からどのような評価方法が採られてきたのかについて考察するとともに、評価に係る阻害要因としてどのようなものがあるのかについて検討を行う。また、学校現場における評価方法についての現状を把握しながら課題について検討する。

## 2 研究の目的

総合的学習における評価方法についての考察と現状把握を行い、評価に係る阻害要因や課題について検討することを研究の目的とする。

## 3 研究の方法

### 3-1 評価の方法についての考察

総合的学習の評価については1998年12月告示の小学校学習指導要領では示されていないが、翌年5月に告示された小学校学習指導要領解説総則編において「教科のように試験の成績によって数値的に評価することはせず、活動や学習の過程、報告書や作品、発表や討論などに見られる学習の状況や成果などについて、児童生徒のよい点、学習に対する意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて適切に評価すること」<sup>(5)</sup>と示している。

また、評価の方法として、ワークシート、ノート、作文、絵、レポートなどの製作物、発表や話し合いの様子から評価したり、児童の自己評価や相互評価を活用したり、活動の状況を教師が観察して評価したりするなどの例示がある。

しかし、上記以外に評価の考え方や方法について示されていない。このことから指導にあたる教師にとって総合的学習の評価は難しく感じ、円滑な展開を阻害する要因の一つになっているのではないかと推察される。

そこで、創設時期に発刊された文献を中心に評価の考え方について考察するとともに、具体的な評価の方法について考察する。そして、考察から得られた具体的な評価の方法のその後の広がりについて考察を加える。

### 3-2 現状把握の方法

前掲の総則編において、活動全体をふり返り、生き方を探るための評価を工夫する必要があると示しており、各学校において具体的にどのような評価方法を用いているのかを把握することは意義があると考ええる。

そこで、前項に挙げた方法によって明らかにすることが

できた具体的な評価方法に焦点を当て、小学校においてどの程度用いられているのかについて調査を行い検討する。

検討の方法としては、筆者が2014年12月に金沢市の小学校第3学年以上の担任教師を対象に行った総合的学習についてのアンケート調査結果をもとに検討する。そして、得られた結果から課題について検討する。

## 4 研究の結果

### 4-1 総合的学習の評価の考え方と方法

#### 4-1-1 創設当初の考え方や方法

ここでは創設当初から数年間に発刊された文献をもとに考察する。

安藤（2001）は評価について、「『寄り添う』という意味のラテン語から生まれた言葉で、学び手が知っていることやできることに関する情報を集めること」<sup>(6)</sup>であると述べている。

これに立脚すると、集められた情報には2種類あると言える。1つは知識や技能に関するテストを行って点数化した情報である。もう1つはテストによって点数化できない情報である。そして、前者の情報を主に評価するのが教科における評価であり、後者の情報をもとに評価するのが総合的学習における評価であると言える。

総合的学習は創設時から数値的な評価を行わず、通知表や指導要録には児童生徒個々のよさ（よい点や進歩の状況など）について記述することになっている。そして、児童生徒個々のよさを評価するための方法として、創設時から注目されたのがポートフォリオ評価である。

ポートフォリオ評価研究の第一人者である加藤・安藤による図書『総合学習のためのポートフォリオ評価』が出版されたのは1999年であり、総合的学習創設直後である。本書の巻頭言で「アメリカやイギリスの『子ども中心主義』に基づく実践の中では、近年、『ポートフォリオ評価 (portfolio assessment)』とか『真正の評価 (authentic assessment)』とかいった言葉で呼ばれる評価活動が活発である。ここから学んで、総合学習のための評価活動をつくり出せると考えた」<sup>(7)</sup>と述べていることと、本書の中でパフォーマンス評価についても述べていることから、ポートフォリオ評価とパフォーマンス評価は、総合的学習が創設されたことが契機であると考えられることができる。

加藤（2002）は、「わが国では今日、『総合的な学習の時間』の評価が大きな関心事になっている。アメリカにあって、『新しい、真正な評価』という文脈の中で考えられてきた『ルーブリック』は、わが国の総合的な学習の時間のための評価の『観点』と考えることができる」<sup>(8)</sup>と述べている。この観点に従って総合的学習が展開する過程で集めた情報がポートフォリオに収められることになる。すなわ

ち、評価の観点を示したものがルーブリックであり、評価の方法がポートフォリオであると言える。

前掲した安藤は、ポートフォリオとは、「特定の目的にそって学び手が自発的に学びの努力や伸びや変容を多面的多角的かつ長期的に評価し、新たな学びに生かすためにさまざまな学習物等を集めたもの」<sup>9)</sup>であると述べ、学習物について、学びのめあて、学習記録やメモ、写真やビデオテープ、日記や作文、手紙、絵やイメージマップなどを挙げている。この学習物の学習記録や作文、絵などは前掲した学習指導要領解説総則編の例示と同様であると言える。

このポートフォリオ評価について、総合的学習が創設されてから3年後に発刊された図書『総合的学習を総点検する』において、著者である高階（2001）は次のように指摘している。「しかし今のところ、総合的学習でのポートフォリオ評価はあまり見当たらない。実施されていても不十分である。そのため、総合的学習のポートフォリオ評価はこれからの課題である」<sup>10)</sup>。

高階は我が国におけるポートフォリオ評価研究の第一人者であることから考えると、創設以降、数年は大きな広がりを見せなかったと考えることができる。

ただ、その翌年に佐藤・古川（2002）によって発刊された『総合的な学習を生かす評価』の巻頭言においては、「総合的な学習の評価の在り方について、各学校や個々の教師が説明責任や結果責任として果たすべき総合的な学習の評価方法、評価規準、通知表、指導要録等の具体的な点について理論と実践事例を示したものである」<sup>11)</sup>と述べ、本書の中で総合的学習に役立つ評価方法として「ポートフォリオ」「ルーブリック」「パフォーマンス評価」についても紹介していることから、この3つの評価方法の進展は総合的学習が創設されたことが契機であると考えられることができる。

さらに、我が国におけるルーブリック研究についての第一人者である高浦（2004）による図書『絶対評価とルーブリックの理論と実際』の巻頭言で、執筆の背景には2002年度より評価に関する研究プロジェクトに取り組んでいることに拠るとし、「国立教育政策研究所の全所的なプロジェクトによる『総合的な学習の授業及び評価に関する開発研究』」<sup>12)</sup>であるとしていることから、「ルーブリック」による評価も総合的学習が創設されたことが契機であると考えられることができる。

このように、総合的学習の創設を契機に我が国においてポートフォリオ評価、パフォーマンス評価、ルーブリックといった評価方法が広がり始めたと考えられることができるが、次のような事実についても確認できる。

2000年に発刊された森・秋田編集の『教育評価—用語300の基礎知識』の巻頭言で、「これからの教育評価のある

べき姿を描き出すことをねらっている。また本書の章立ては、教職志望の学生の皆さんや教育現場の先生方など幅広い読者の便宜を考えた上で構成されている」<sup>13)</sup>と述べている。しかし、重要用語300の中には「ポートフォリオ評価」「パフォーマンス評価」「ルーブリック」は含まれていない。

このことも加味すると、これらの評価の方法は総合的学習の創設が契機であると言えるが、学校現場における広がりはいくつとしてみたものであったと推察することができる。

#### 4-1-2 創設後の考え方や方法

ここでは創設後10年ほど経過した時期に発刊された文献をもとに考察する。

高浦（2011）は、「ポートフォリオには、テスト以外に極めて多様な評価資料・情報が入れることになる。それまでの学習の過程や成果が分かる一切の資料が納められることになる」<sup>14)</sup>と、納める資料の多様性について言及している。このことは前掲の安藤の言う「学び手が知っていることやできることに関する情報」と合致していると考えられることができる。このころからポートフォリオ評価の考え方や意味は共通していると言える。

このように、学習に関する様々な資料を多岐に渡って集めることから、吉富（2014）はポートフォリオに収められるものを3つに整理し、提示している。「①学習の成果としての作品や学びのプロセスを示す作業メモ、②子どもの自己評価、③教師による指導と評価の記録など」<sup>15)</sup>である。

ところで、ポートフォリオ評価は、1989年に生活科が新設された時期にテストに代わる方法として小学校低学年で導入された過去がある。ただ、生活科のみに関する評価方法であったことから広がりを見せなかったと言える。その後、1998年に総合的学習が創設されたことにより、学びの過程の評価の方法、個々のよさ（学習上の進歩や発達）を評価するための方法として再び注目されたのである。

総合的学習を契機に再注目されたポートフォリオ評価のその後の広がりはどうであったのだろうか。

高階（2001）の指摘から10年後の2011年、日本生活科・総合的学習教育学会誌に掲載された高浦（2011）の論文には次のような指摘がある。「しかし中にはポートフォリオというよりは、資料を単に収集した『学習ファイル』と類似になったりしたものもある」<sup>16)</sup>。

高浦もまた我が国におけるポートフォリオ評価研究の第一人者であることから、ポートフォリオ評価の意味が正しく理解されてこなかった傾向があると推察できる。

以上のようなことから、現在においてポートフォリオ評価がどの程度用いられているのか調査、検討する必要があると考える。

#### 4-1-3 ポートフォリオ評価, パフォーマンス評価, ルーブリックについて

総合的学習は教科の学習のように知識や技能をどれだけ身に付けたかを評価するものでない。また、総合的学習の学びは広範かつ多様である。したがって、指導にあたる教師が目指す児童像を設定して主体的な学習活動を展開し、その過程で児童一人一人の学びの状況を把握した上で次の学習へと展開していきながらゴールを迎えるような支援が必要である。

このような意味において「過程の評価」が重要であり、その方法としてポートフォリオ評価, パフォーマンス評価, ルーブリックによる評価が注目されたと考えることができる。

#### 4-1-4 学習指導要領一部改正時の評価の考え方や方法

2003年12月に小学校学習指導要領が一部改正された。総合的学習においては、従前からの2つのねらいにもう1つねらいが加わった。「(3)各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活に生かし、それらが総合的に働くようにすること」<sup>[7]</sup>というねらいである。

これは創設当初から総合的学習の授業の時間に総合的学習だけを実施する学校が多かったという課題に対応し、総合的学習と教科学習とを関連させて展開することを示したものである。

また、評価のことも含めた全体計画に関する事項として、「各学校においては、学校における全教育活動との関連の下、目標及び内容、育てようとする資質や能力を及び態度、学習活動、指導方法や指導体制、学習評価の計画などを示す総合的な学習の時間の全体計画を作成するものとする」<sup>[8]</sup>ことが加わった。

これは育てたい児童像を明確にしない活動や明確な評価計画を持たない活動中心の学習が展開されるという課題に対応し、総合的学習の全体計画を作成することを示したものである。

上記に関し寺尾（2005）は、「今回、『教科等の関連付け』が総合の学びに要請されたが、そのことは指導計画作成の折に配慮するといったことで済ませないで、当の児童生徒の必要感や必然性の意識を喚起して、かれら自身が教科等の関連をしないではおれないように運んでいくことこそ肝要であろう」<sup>[9]</sup>と述べている。つまり、総合的学習の趣旨にある「横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動」<sup>[10]</sup>をより充実させていくことの重要性を示したものであると言える。

#### 4-1-5 学習指導要領改訂に見られる評価の方法

2008年8月に小学校学習指導要領が改訂された。同時に小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編が告示された。そして、その中で評価の方法として以下のことが例示された。

- ・ 発表や話し合いの様子、学習や活動の状況などの観察による評価
- ・ レポート、ワークシート、ノート、作文、絵などの制作物による評価
- ・ 学習活動の過程や成果などの記録や作品を計画的に集積したポートフォリオによる評価
- ・ 一定の課題の中で身に付けた力を用いて活動することによるパフォーマンス評価
- ・ 評価カードや学習記録などによる児童の自己評価や相互評価
- ・ 教師や地域の人々等による他者評価 など<sup>[11]</sup>

上記のように今次の改訂で初めて「ポートフォリオによる評価」「パフォーマンス評価」の用語が例示されたことは注目に値すると考える。ただ、「ルーブリック」に関しては示されていない。前述したようにルーブリックは評価の「観点」と考えることができるため、方法としての例示に含めなかったと推察される。

#### 4-2 アンケート調査による現状把握

##### 4-2-1 アンケート調査の手続き

金沢市内の小学校から学年2クラス以上の学校を任意に10校抽出し、総合的学習を担当している第3学年以上の学級担任を対象とした。調査は2014年12月10日から12月20日の期間に行った。

依頼の方法は、10校の小学校を個別訪問し、学校長に調査の趣旨について口頭で説明し了承を得た。

回収方法は訪問時に学校長に手渡しした返送用封筒によって行った。

その結果、対象となった121人の教師のうち117人から回答を得た。回収率は96.7%であった。回答が得られた教師の年代別の割合について図1に示す。

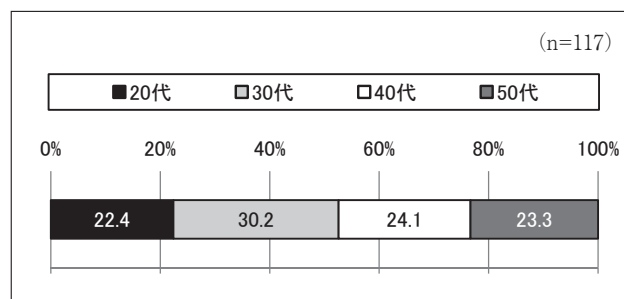


図1 回答者の年代別の割合

#### 4-2-2 調査の内容

調査の内容は、1. 学習指導が得意な教科は何か、2. 総合的学習の学習指導は得意か、3. 総合的学習に熱心に取り組んでいるか、4. 総合的学習に必要とされる教師の力量はどの程度身に付いていると思うか、5. 総合的学習に取り組む児童の学習状況はどうか、6. 総合的学習の評価方法としてどのような方法を用いているか、7. 総合的学習の学習指導は好きか、の7観点で設定した。

なお、本研究においては評価の方法に焦点を当てるため、6. 総合的学習の評価方法としてどのような方法を用いているか、について分析を行う。

#### 4-2-3 評価方法についての質問内容

総合的学習の評価方法としてどのような方法を用いているか、次のような質問を設定した。

- ①ポートフォリオ評価を、総合的学習の評価方法として用いていますか。
- ②パフォーマンス評価を、総合的学習の評価方法として用いていますか。
- ③ルーブリックを用いた評価を、総合的学習の評価方法として用いていますか。
- ④上で挙げた評価方法やその他の評価方法について詳しく知りたいですか。
- ⑤校内で総合的学習における評価方法について勉強会や研修会などを行っていますか。

以上の5つの質問に対し、①②③の質問には「よく用いている」「ときどき用いている」「あまり用いていない」「全く用いていない」の選択肢を設け、④の質問には「とても知りたい」「知りたい」「あまり知りたくない」「全く知りたくない」の選択肢を、⑤の質問には「よく行っている」「ときどき行っている」「あまり行っていない」「全く行っていない」の選択肢を設けた。

#### 4-2-4 3つの評価方法を用いている度合い

質問①②③の回答結果をもとに、「ポートフォリオ評価」「パフォーマンス評価」「ルーブリック」を用いている度合いについて検討するため、図2のようにグラフ化した。

ポートフォリオ評価を「よく用いている」と答えた教師の割合は12.1%で、「ときどき用いている」の37.9%を合わせると50.0%になる。ちょうど半分の割合であることから、総合的な学習の評価方法としてある程度浸透していると言えるが、あまり浸透していないとも言える。

パフォーマンス評価を「よく用いている」と答えた教師の割合は6.0%で、「ときどき用いている」の40.5%を合わせると46.5%になる。ポートフォリオ評価に比べて少し低

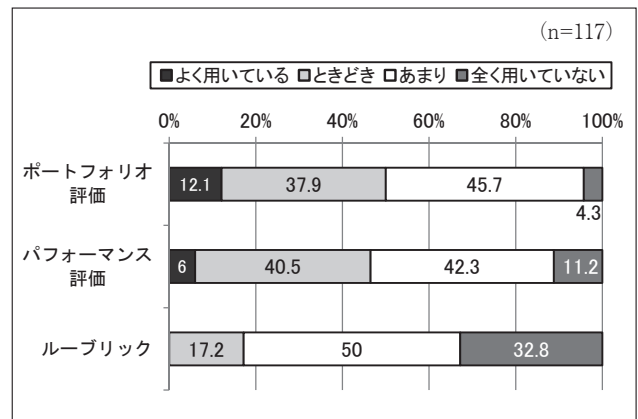


図2 3つの評価の方法を用いている度合い

い割合であるが、ほぼ半数の割合であると考えられることができる。このように考えると、2つの評価方法をその都度選択して用いていると推察することもできる。

一方、ルーブリックを「よく用いている」と答えた教師の割合は0%で、「ときどき用いている」と回答した割合は17.2%である。ただ、「あまり用いていない」の回答が50.0%を示していることから、総合的学習の評価方法として少しは浸透していると言えるし、あまり浸透していないとも言える。

加藤（2002）が言うように、「ルーブリックは、わが国の総合的な学習の時間のための評価の『観点』」<sup>29</sup>であると考え、指導にあたる教師はルーブリックという言葉は用いなくとも、評価のための観点を設定して評価を行っていると言推察することができる。

#### 4-2-5 評価についての意識や研修会などの実態

質問④の回答結果をもとに、3つの評価方法やその他の評価について詳しく知りたいと思うかの割合を図3のようにグラフ化した。

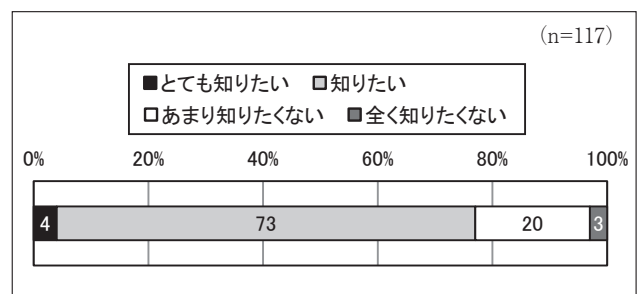


図3 評価方法についてどの程度知りたいかの割合

「とても知りたい」と「知りたい」を合わせた割合は77%を示し、ポートフォリオ評価やパフォーマンス評価などの評価方法について知りたいとの意識を持つ教師が多い傾向にあることが伺える。

「あまり知りたくない」と答えた割合は20%である。一定数の教師はポートフォリオ評価やパフォーマンス評価な

どの評価方法についてあまり知りたくない意識している傾向にあることが伺える。

また、質問⑤の回答結果をもとに、校内における評価方法についての勉強会や研修会をどの程度行っているかの割合も同様に図4のようにグラフ化した。

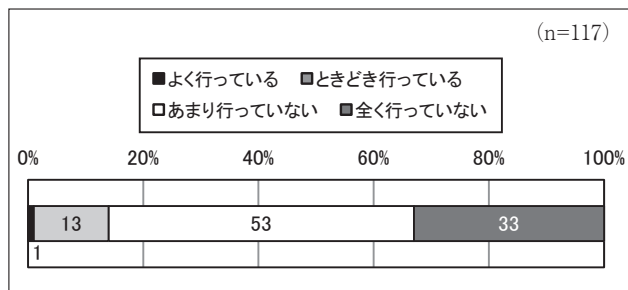


図4 校内の勉強会や研修会を行っている割合

勉強会や研修会を校内で「よく行っている」と答えた教師の割合は1%,「ときどき行っている」と答えた割合は13%で、両者を合わせても14%であることが分かる。

一方、「全く行っていない」と答えた割合は33%を示していることから、校内での勉強会や研修会の機会が少ないことが示唆される。

質問④と⑤の結果から、ポートフォリオ評価やパフォーマンス評価などの評価方法について知りたいと意識する教師は多いが、校内での勉強会や研修会の機会が少なく、こ

のことが総合的な学習の展開の阻害要因の一つになっているのではないかと推察することができる。

このように考えると、校内での勉強会や研修会の機会を如何に見出すかが課題であると思われる。

## 5 研究のまとめ

評価について創設当初から見てくることにより、ポートフォリオ評価やパフォーマンス評価、ルーブリックといった固有名詞による評価の方法が広がってきていることが分かった。評価の方法は創設当初の学習指導要領や学習指導要領解説では示されなかったが、創設から数えて10年後の改訂によって、これらの評価の方法が例示されたことも分かった。

しかし、小学校教師を対象とした調査において、ポートフォリオ評価やパフォーマンス評価を用いる度合いは50%程度の傾向にあることが示され、ルーブリックを用いている度合いは極めて低い傾向にあることが示された。また、これらの評価方法についてもっと知りたいと意識する教師は多い傾向にあるが、校内では評価方法についての勉強会や研修会の機会が少ない傾向にあることも示された。

これらのことから、ポートフォリオ評価やパフォーマンス評価にルーブリックを含めた評価の方法について、教師たちが学ぶ機会を設けることが課題として挙げられる。

## 注

- (1) 亀井浩明・有園格・佐野金吾編著（1996）,『中教審答申から読む21世紀の教育』,ぎょうせい, P.63
- (2) 文部省（1998）,『小学校学習指導要領』,大蔵省印刷局, P.2
- (3) 黒上晴夫編著（2002）,『総合的な学習のための評価への羅針盤』,日本文教出版, P.16
- (4) 前掲書(2), P.4
- (5) 文部省（1999）,『小学校学習指導要領解説総則編』,東京書籍, P.54
- (6) 安藤輝次著（2001）,『ポートフォリオで総合的な学習を創る—学習ファイルからポートフォリオへ—』,図書文化, P.9
- (7) 加藤幸次・安藤輝次著（1999）,『総合学習のためのポートフォリオ評価』,黎明書房, P.1
- (8) 加藤幸次（2002）,「評価活動のためのルーブリック」,指導と評価, Vol.48, 日本図書文化協会, P.21
- (9) 前掲書(6), P.17
- (10) 高階玲治著（2001）,『総合的な学習を総点検する』,明治図書, P.173
- (11) 佐藤真・古川治編著（2002）,『総合的な学習を生かす評価』,ぎょうせい, P.2
- (12) 高浦勝義著（2004）,『絶対評価とルーブリックの理論と実際』,黎明書房, P.1
- (13) 森敏昭・秋田喜代美編集（2000）,『教育評価-重要用語300の基礎知識』,明治図書, P.5
- (14) 高浦勝義著（2011）,『指導要録のあゆみと教育評価』,黎明書房, P.85
- (15) 吉富芳生著（2014）,『現代中等教育課程入門』,明星大学出版部, P.195
- (16) 高浦勝義（2011）,「教育評価研究と生活科・総合的な学習」,日本生活科・総合的な学習教育学会誌, 第18号, P.62
- (17) 文部科学省（2003）,『小学校学習指導要領（一部改正）』,国立印刷局, P.3
- (18) 前掲書(17), P.3
- (19) 寺尾慎一（2005）,「生活科と総合,教科の学びの改善をどうするか」,日本生活科・総合的な学習教育学会誌, 第12号, P.17
- (20) 前掲書(17), P.2
- (21) 文部科学省（2008）,『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』,東洋館出版社, PP.78-79
- (22) 前掲書(8), P.21